

はじめに ～日本中世社会をめぐる二つの歴史像～

宋希環『老松堂日本行録』(村井章介校訂 岩波文庫)

応永 27 年(1420) 6 月末、帰路の「阿麻沙只(尼崎)村」にて

日本の農家は、秋に水田を耕して大小麦をまき、明年初夏に大小麦を刈りて苗種をまき、秋初に稲を刈りて木麦(そば)をまき、冬初に木麦を刈りて大小麦をまく。一つの水田に一年三たびまく。

同年 4 月下旬、往路の「利時老美夜(西宮)」にて

…毎(つね)に聴く飢民の食を乞うる声

日本は人多し。また飢人多く、また残疾多し。処々の路頭に会坐し、行人に逢えば則ち錢を乞う

⇒時期や地域や階層による差異と見るのが穏当であるが、それで正解なのか?

I. 戦後歴史学が明らかにした日本中世史像

・戦前の中世史像 = 乱れた「暗黒」の時代

= 中央政治権力が不安定、権威失墜、社会秩序が乱れた時代

・戦後歴史学が解明した新たな中世史像 = 豊かな「発展」の時代

農業生産力の拡大を中心に、諸産業が発展をとげた時代

= 農業の発展、商業・交通の活発化、農村と都市の民衆の台頭(惣村・自治都市)、
 荘家一揆・惣荘一揆・土一揆、今日に伝わる「日本文化」の形成

◎「農業の発展」= 二毛作可能乾田の普及を軸に展開

水田の二毛作の初見は 12c 伊勢国、鎌倉末期には西国を中心に普及、15c 東国へも

二毛作の普及は、用水の整備と肥料の使用による地味の回復が必須条件

用水路の開削・運用が、村落共同体(惣)を基礎に行われた

山野の共同利用の発展は、村落共同体(惣)の発展と並行

肥料 = 刈敷(山野の草や木の葉を耕地に敷き込む)

肥灰(草木を燃やしてつくる)

糞尿(人畜の排泄物) → 貯蔵用の大型の甕の普及が必要

永享年間(1429 ~ 1441) 来日の朝鮮使節朴瑞生

水力自転揚水車が日本の農村に普及しているのを見聞し、わざわざその模型をつく

らせて帰朝し、世宗に献上

◎「惣村」

農業技術の進歩

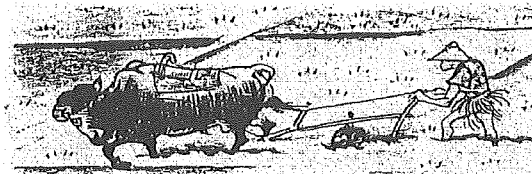
→ 余剰生産物の発生

→ 市場と商人の発達、惣の発達

・中世後期、荘・郷・村を単位とする地縁的な結合が強まり、自治組織「惣」が畿内を中心に出現

・農民は村々の鎮守社の宮座に結集し、自治的に村を運営していくための寄合を形成

・共有財産(山林原野、鎮守社・村堂の田畠、船舶、池・用水路)



松崎天神縁起(防府天満宮)

・惣の置文・掟 = 厳しい相互規制と罰則(「自検断」)

・村を戦乱や領主の非法から守るために結束を強め、荘園の枠をこえた連帯も拡大

◎交流・流通と諸産業の発達

・貨幣経済の浸透・拡大 渡来銭(宋銭・明銭)を中心とする銅銭の流通が拡大

・市・町・港の発達 定期市の形成・展開 馬借・車借・問丸の活躍

・新たな産業の発展 「七十一番職人歌合」「三十二番職人歌合」

・信用関係の拡大 為替取引の形成=「割符(さいふ)」の使用 土倉・酒屋

II. 災害や飢饉に着目する現在の日本中世史研究

・災害に関する史料の特徴 = 京都中心の断片的情報や伝聞情報が大半

筆者の主観による記述、被害の規模を測る基準がない

・表 1 = 12 ~ 16c の飢饉・災害(旱魃・冷害・虫害・風水害・地震)・疾疫のうち、
 山陰地域に該当する(もしくはその可能性を否定できない)事例を列挙

◎旱魃・冷害・虫害・風水害による凶作の連続

寒冷化による不安定な気候

旧暦 4 ~ 6 月の旱魃、6 ~ 8 月の長雨・洪水・低温・病虫害、8 ~ 10 月の台風

戦乱の影響による不作(天正 4 年秋上幸益書状 ← 「稲薙」「麦薙」の影響か)

◎飢饉・疾疫による生存の危機

寛喜の大飢饉 寛喜年間(1229 ~ 1232) の

寛正の大飢饉 長祿 3 年(1459) ~ 天候不順、炎旱・大暴風雨・冷害、蝗の発生
 飢饉と疫病に襲われ、中国地方では人肉を食う状況

寛正 2 年(1461)、餓死者の増大(京で 2 ヶ月で 82,000 人が餓死)

「三日病」などの疾疫で多数の死者 長享 9 年(1489) 山陰諸国に流行

秋上幸益書状写(厳島野坂文書)

追って啓上せしめ候、よって近年、祇候(伺候)いたすべき覚悟に候ところ、当国御国次不作について、無調法を俟無沙汰いたし候、あわせて御立願の御礼儀、かれこれ延引、迷惑せしめ候、去る春参るべきの由、御家来の衆中へも参会申す約諾申し候ところ、不思議に中風相煩い候て、今に然々これ無きについて遅々候、それにつき、朝酌の儀、私式ゆめゆめ望み申す儀これ無く候え共、元就様より預け下され候条、御判頂戴いたし候、然れば国次について、かの在所、新山に程近く候て、一円不作つかまつり候、近年は干損かれこれ以て迷惑に存じ候、然りといえども御理り申し候わず候えば、神慮勿体無く存じ候間、まず去納までの辻、冥加と存じ、進上いたし候、当年に至り毛の上よく御座候わば、じかさま取沙汰つかまつりたく存じ候、万事御取り成し仰ぎ候、この国において相当の御用等、仰せをこうむり、余儀を存ずべからず候、何篇、養生を加え、社参いたし、積もる御礼申し述べ候、委細は、この者申し入るべく候、恐々謹言、

天正四年四月四日 秋上三郎右衛門尉幸益

種盛殿 御座所

(『松江市史 史料編 中世Ⅱ』一五八五)

表1 中世の飢饉・災害一覧

年	西暦	事 項
保延元	1135	天下疾疫流行、諸国霖雨・洪水、飢饉
承安4	1174	諸国一同炎旱
治承4	1180	前年の天下一同旱魃に倍する大旱魃 天下皆損亡
養和元	1181	諸国飢饉 餓死者多数
元暦元	1184	諸国旱魃
元暦2	1185	諸国大旱 諸国飢饉
建久元	1190	諸国大旱洪水
建久3	1192	諸国疱瘡流行
建久8	1197	諸国疾疫流行(「一心房病」)
建仁元	1201	諸国大洪水
元久元	1204	諸国大風損害多数
建保4	1216	諸国大風洪水
貞応2	1223	諸国大疫
嘉禄元	1225	疱瘡流行
寛喜元	1229	諸国大雨洪水
寛喜2	1230	諸国飢饉 天下一同不熟 餓死多数 暴風・霜降・降雪
寛喜3	1231	天下一同大飢饉 暴風・洪水 諸国疫疾流行(翌年も) 死者多数
天福元	1233	天下一同飢渴
仁治3	1242	諸国咳病
正元元	1259	諸国大飢饉・疫病 死者多数(翌年も)
弘長3	1263	諸国大風・損亡
文永10	1273	諸国大旱 安芸でも不作損亡飢饉
建治4	1278	日本国数年連続飢饉
弘安6	1283	悪疫流行
興国元	1340	石見洪水(益田荘納田郷)
文和2	1353	諸国霖雨洪水
延文3	1358	連年、諸国洪水
康安元	1361	康安地震(南海道地震)
貞治4	1365	天下大咳病 日本国皆々咳病
貞治5	1366	飢饉・疫病(翌年も東西疾疫)
康暦元	1379	諸国咳病
嘉慶元	1387	諸国疾病流行
康応元	1389	石見洪水・損失(周布郷) 石見年々大洪水
明德2	1391	天下飢饉 諸国疫癘死者多数
明德4	1393	旱天 大洪水 飢饉
応永14	1407	諸国咳病流行 熊野大地震
応永27	1420	大旱魃 天下大飢饉(百文米一升売)
応永28	1421	大飢饉疫病(播磨～陸奥) 死者多数
正長元	1428	諸国三日病流行 天下飢饉死者多数
永享10	1438	飢饉・疫病 死者多数
嘉吉3	1443	諸国洪水
文安5	1448	疫病・飢饉・地震・水災・大雨・洪水

- 注(1) 「諸国」は複数国という意味にすぎず、「天下」は京都中心の視点が含まれるので、山陰地域に該当する事例ではないものが多数含まれていると考えられる。
- 注(2) 事例の性格上、史料上の言葉のみから被害の実情を全体的に把握することは、ほぼ不可能。
- 注(3) 天正地震が発生した天正13年11月29日はグレゴリオ暦1586年1月18日にあたるので西暦を「1586」、慶長地震が発生した慶長9年12月16日はグレゴリオ暦1605年2月3日にあたるので西暦を「1605」、とした。
- 【参考文献】 荒川秀俊・宇佐美龍夫著『日本史小百科22 災害』(近藤出版社、1985年)
峰岸純夫『中世 災害・戦乱の社会史』(吉川弘文館、2001年)
藤木久志他『増補：日本中世における日損・水損・風損・虫損・飢饉・疫病に関する情報(9～17世紀)』
(外園登基『日本中世における民衆の戦争と平和』科研報告書、2003年)
矢田俊文『中世の巨大地震』(吉川弘文館、2009年)
寒川旭『秀吉を襲った大地震』(平凡社新書、2010年)

Ⅲ. 松江地域の中世社会

◎水運と都市の発展

- (1) 古代～ 島根半島を特徴づける内水面交通・物流

年	西暦	事 項
享徳元	1452	諸国大雨洪水
長禄元	1457	疾患・炎患により改元
寛正元	1460	天下大飢饉・大旱 諸国疫病 備州・美作・伯耆三ヶ国大飢饉
寛正2	1461	天下飢饉 死者多数
寛正4	1463	諸国疾疫
文明4	1472	天下大旱飢死 日本国中餓死多数
文明14	1482	西国洪水 諸国平均洪水
長享2	1488	諸国疾疫流行死者多数
長享3	1489	天下三日病平均 山陰山陽諸国疫疾流行 天下餓死 山陰道雨泥埋屋宇草木
明応元	1492	諸国疫病 死者多数
明応4	1495	諸国疱瘡流行
明応5	1496	諸国大旱 諸国暴風雨洪水
明応7	1498	明応地震(東海沖大地震) 諸国大地震
明応8	1499	諸国飢饉
文亀元	1501	諸国大旱魃 飢饉 大雪
文亀3	1503	天下一等大旱魃 九州でも死者多数
永正元	1504	天下飢饉 疾疫流行(翌年も)
永正7	1510	諸国飢饉
永正15	1518	諸国大飢饉 餓死者多数(翌年も)
大永5	1525	諸国痘瘡流行
天文3	1534	諸国疫病流行
天文4	1535	諸国大旱
天文8	1539	諸国蝗害 諸国大雨洪水
天文9	1540	諸国大風雨 諸国大飢饉 疫病流行
天文11	1542	石見大風雨
天文13	1544	出雲・伯耆飢饉3年目(2万人流浪) 諸国洪水
弘治3	1557	天下炎旱、大飢饉 諸国田畠皆干損
永禄4	1561	諸国疾疫流行(翌々年も)
永禄9	1566	天下飢饉
天正2	1574	石見炎旱(翌年も)
天正4	1576	近年出雲一国不作干損
天正6	1578	諸国大洪水
天正8	1580	諸国疫病
天正13	1586	天正地震(東海・東山・北陸・畿内地震)
天正16	1588	諸国疫疾流行
天正17	1589	諸国に栗のような雹(翌年も)
文禄2	1593	諸国悪疫流行(三日病天下一同)
文禄3	1594	大風で諸国損亡膨大
文禄4	1595	大雨洪水
慶長元	1596	伏見地震 豊後地震
慶長6	1601	諸国飢饉
慶長9	1605	慶長地震(南海沖地震)・津波

- (2) 中世前期～ 中世西日本海水運・美保関の発展、廻船ルートの形成と隆盛

- (3) 14・15世紀 大陸との通交、日常的交流・物流の広域化、港湾都市の形成

- (4) 16世紀 石見産銀の輸出、東アジア海域の経済変動、港湾都市の発展

米子・安来・白潟・末次・平田・杵築・宇龍などの発展

◎多様な生業の展開 ＊職人の絵は群書類従本「七十一番職人歌合」による

中世＝米作以外の多様な生業が展開

＝専業・兼業というよりは雑業。専門的な職人とともに、日用品の自給に加え

た雑多な生業を複合的に営む一般庶民が無数に存在した社会

- (1) 貢納物としての産品

中世の年貢・貢納物 米および米以外の地域産品(「土産」)

島根半島の事例 ＝鉄・筵・畳・鯛(するめ)・海苔・干鯛・烏賊・冬鳥・鷹・油筒

- (2) 絹糸・絹布 出雲国は「もっとも絹布多し」(「新撰類聚往来」)

大永年間～天文年間の『御湯殿上日記』記事

＝皇室領の千酌・笠浦から、「御きぬ」「御なか」を献上

＝島根半島周辺における養蚕業の盛行 絹の品質

- (3) 紺染 天文12年(1543)多胡久盛知行分に「意宇郡紺役一円」

＝16世紀前半の意宇郡内各所に紺屋が存在、「紺役」を課され

る程度に専門的な性格を強めた職人たちが、郡単位の組織的

なまとまりをもって活動していたことを示す。

- (4) 塩 明德2年(1391)佐陀荘に塩浜二反

文安元年(1444)の平浜八幡宮惣検校分に塩浜や塩畠

天文12年(1543)、多胡氏が徴収する課役に「塩役銭」

- (5) 番匠 中世の「大工」＝土木・建築作業における技術統括者

現在の大工に該当する用語は「番匠」



綿売



紺掻

『御湯殿上日記』享禄四年十一月二四日条
廿四日。ちゝみよりとしゝの御きぬ。御ながま
いる。めてたし。

『松江市史 史料編4 中世Ⅱ』八五〇

尼子晴久袖判多胡久盛知行注文写

(毛利家文庫諸臣証文・多胡家)

乃木之内(意宇郡) 御代官
(花押写)
おか村 御給所
島根之内(意宇郡) 御給所
岩坂之内(意宇郡) 御給所
太郎丸名 人夫御免 御給所
兄弟両三人抱分 今度あらため計候事、
(島根郡) 北浦之内江淵名 永代従湯殿美濃守買得
(多胡久盛) 意宇郡紺役一円 従大殿様御判アリ
(意宇郡) 矢田村名 又散田分
春林分 米原新五兵衛所ヨリ年記
(意宇郡) 揖屋相物役銭之事
塩役銭之事 八幡市場モ同前也、
(石州之内) 大願寺 買得
以上、

天文十二年七月廿三日 多胡次郎右衛門尉 久盛

『松江市史 史料編4 中世Ⅱ』九五三